

第二章

私は若い頃、1級建築士になる夢をもち大学の建築学科に通い勉強をしておりました。

しかし、大学の授業についていけなくなり挫折し大学も中退してからは家具の販売員として職に就きました。

そして、約10年ほど大阪府の家具店で働き特に仕事に不満はありませんでしたが、目標から逃げ出した自分への劣等感を常に感じていたことを覚えています。そんな中、30歳を越えたあたりにやはりもう一度憧れであった建築士にチャレンジをしたくなりました。そこで1級建築士の勉強を再開することを決意した時の希望、目標への意欲が自分の全身を駆け巡る感覚を今も思い出します。

まずは勉強時間を確保するため務めていた家具店に頼みこみ、正社員の立場からアルバイトに変更して頂きました。時間の確保はできるようになった代わりに収入が激減したため、そこで家賃の低い物件を当時探しておりました。その時近所の不動産屋さんを紹介してもらったのが築58年の駅近のアパートです。

リノベーションをしているため築年数のわりにとっても綺麗ではありましたが、構造が古い木造ということもあって音漏れはひどいとの事。ただ、駅近でもあり家賃が以前の住居の半分ほどと好条件であったため、当時すぐに入居を決めた記憶があります。不動産屋さんの言うとおりに、そのアパートに引っ越してからすぐに音漏れを実感しました。隣室の声はもちろん、共用部の声や足音もよく響いていましたが、試験合格までの辛抱だと思い生活をし始めました。

私の部屋は2階の202号室。隣の201号室には80代くらいの高齢女性が住まれているいつも笑顔で挨拶をしてくれる方でした。その方は共用部の玄関横に植木鉢をいくつか置かれ毎日夕方に水やりをする習慣をとられているようで、私が仕事から帰宅する頃にも植木鉢からわずかに水が流れていたことを記憶しています。

反対隣の203号室には30代前半の男性が入居されており、この方も愛想の良いサラリーマン風の方でした。

引っ越してから約2か月ほどが経ち、生活も徐々に慣れ始めてきたころ。

私はその日仕事が休みで朝から自宅で試験勉強をしておりました。それは、ちょうど夕方近くにさしかかった時のことでした。

.....

つづく